

第1回 東京国際ドキュメンタリー・アーカイブス

Tokyo International Documentary Archives Vol.1

土本典昭

フィルモグラフィ展2004

TSUCHIMOTO Noriaki Filmography 2004

1959 / 1960

年輪の秘密シリーズ

出雲かぐら

1959 / 17分 / 16mm / 白黒 / 岩波映画製作所

久留米がすり

1959 / 17分 / 16mm / 白黒 / 岩波映画製作所

有田の陶工たち

1959 / 17分 / 16mm / 白黒 / 岩波映画製作所

博多人形

1959 / 17分 / 16mm / 白黒 / 岩波映画製作所

江戸小紋と伊勢型紙

1960 / 17分 / 16mm / 白黒 / 岩波映画製作所

糸あやつり

1960 / 17分 / 16mm / 白黒 / 岩波映画製作所

京のたべもの

1960 / 17分 / 16mm / 白黒 / 岩波映画製作所

日本独特の伝統文化といわれる特殊な技術や製法をそこに携わる人間を通じて紹介、日本各地の52の伝統文化が記録された。日本発見シリーズ同様、TV作品とはいえ制約は少なく、当時、東陽一、藤江孝、神馬玄佐雄、秋山鈴一ら、新人の活動の舞台となった。
●アテネ 8 / 4 (水) 13:30～
川崎 8 / 22 (日) 13:30～

1961 / 1962

日本発見シリーズ

三重県

1961 / 29分 / 16mm / 白黒 / 岩波映画製作所

佐賀県

1961 / 29分 / 16mm / 白黒 / 岩波映画製作所

大分県

1961 / 29分 / 16mm / 白黒 / 岩波映画製作所

鹿児島県

1961 / 29分 / 16mm / 白黒 / 岩波映画製作所

山梨県

1961 / 29分 / 16mm / 白黒 / 岩波映画製作所

東京都

1962 / 29分 / 16mm / 白黒 / 岩波映画製作所

現在の教育科学番組の先鞭となるTV向け作品。都道府県ごとにまとめた日本地誌であり、自然・産業・文化など幅広い視野から紹介している。教育や企業のPR映画など記録映画の製作を手掛けた岩波映画において、同シリーズは若手作家の登竜門的存在であった。
●三重県・佐賀県・大分県
アテネ 8 / 4 (水) 16:00～
川崎 8 / 28 (土) 13:30～
8 / 29 (日) 16:00～
●鹿児島県・山梨県・東京都
アテネ 8 / 4 (水) 18:00～
川崎 8 / 28 (土) 16:00～
8 / 29 (日) 13:30～

1963

ある機関助手

1963 / 37分 / 35mm・16mm / カラー
岩波映画製作所



1962年、三河島で起きた大事故の印象を一掃するため、国鉄当局が鉄道の安全性をPRする映画を企画。事故のあった常磐線で、労働強化を強いられた労働者の実像を取材、ある機関助手の一日を追った。第18回芸術祭文部大臣賞、ベルリン映画祭青年文化賞受賞など。
●アテネ 7 / 23 (金) 14:30～
8 / 4 (水) 20:00～

1965

水俣の子は生きている

1965 / 25分 / 16mm / 白黒
日本テレビ



水俣病発生から10年、町から水俣病は忘れられようとしていた。しかしその陰には、僅かな見舞金と生活保護だけで貧窮する患者の家族や、入院すらできない重症の子どもたちがいた。水俣病のケースワーカーとして実習に来た、女子短大生の1週間の記録。
●アテネ 7 / 23 (金) 17:10～
8 / 5 (木) 17:10～

1964

ドキュメント 路上

1964 / 54分 / 35mm・16mm / 白黒
東洋シネマ



高度経済成長の只中、都市整備の工事が進み道路事情の悪化した東京で、タクシー運転手の労働実態に目を向け、その日常を追った。完成後、交通安全映画として活用されることになっていたが、未公開のままとなっていた。芸術祭奨励賞、ヴェネチア映画祭特別審査委員会賞など。
●アテネ 7 / 23 (金) 15:40～
8 / 5 (木) 15:40～

留学生チュア スイリン

1965 / 51分 / 16mm / 白黒
藤プロダクション



英領マラヤ(現マレーシア連邦)の国費留学生として来日したチュア・スイリン。母国の未来を憂い、抗議行動を起こしたことで国費留学生の身分を取り消されてしまう。除籍処分を下した大学に対し、復学を求める留学生チュアと支援する学生たちの姿を追う。ライブチヒ映画祭招待。
●アテネ 7 / 23 (金) 17:10～
8 / 5 (木) 17:10～

1965

ノンフィクション劇場 市民戦争

1965 / 25分 / 16mm / 白黒 / 日本テレビ



広島県尾道市の貧民街、「国際マーケット」に店を開く戦後の引揚者と朝鮮人が港湾整備計画で無償退去を通告される。貧民街の住人が在日と結婚した日本人女性を中心に、市と住民のやりとりを克明に記録。日本テレビ「ノンフィクション劇場」で放映された。
●川崎 8 / 22 (日) 16:00～

1973

水俣レポート1 実録 公調委

1973 / 48分 / 16mm / 白黒 / 青林舎



公害等調整委員会は、判決前に多くの患者との和解を済ませるため、印鑑盗用・文書偽造の書類まで受理。患者側も調停派、訴訟派などに分かれ、多くの問題を抱えていた。水俣病裁判結審の2ヵ月前に撮影され、緊急報告のため撮影後わずか2ヵ月で発表された。
●アテネ 7 / 26 (月) 17:40～
8 / 6 (金) 20:00～

1976

水俣病＝その20年＝

1976 / 43分 / 16mm / カラー / 青林舎



1956年当時、奇病と恐れられ、伝染病か中毒かさえも分からなかった水俣病。その発生から水俣病裁判の終結、チッソ本社との長く続いた交渉の日々を追う。膨大な記録フィルムの中から構成された、水俣病解明と現状を分かりやすく解説した20年史。
●アテネ 7 / 28 (水) 18:10～
8 / 10 (火) 16:20～

1968

シベリア人の世界

1968 / 99分 / 35mm・16mm / カラー
日本映画新社



ー45度の過酷な環境で木材伐採に従事する労働者など、シベリアに暮らす人々の生活にカメラを向ける。イルミネーションに飾られたモスクワのメーデーと対比することで、シベリアの現実に向った作品。1968年毎日映画コンクール 社会記録部門最高受賞。
●アテネ 7 / 24 (土) 13:30～
8 / 5 (木) 19:00～

水俣一揆――生を問う人びと――

1973 / 108分 / 16mm / 白黒 / 青林舎



水俣病裁判判決の後、加害者であるチッソ本社と水俣病患者との直接交渉を追った緊急レポート。生涯の医療と生活の補償を求める被害者に対し、チッソは慰謝料の支払いのみで済ませようとする。人間としての尊厳をかけた水俣病患者達による闘いの記録。
●アテネ 7 / 26 (月) 19:00～
8 / 7 (土) 13:10～

生きて人間旅行日本の教育1976

―少年は何を殺したか―

1976 / 前編・23分 後編・23分 / 16mm
カラー / 日本テレビ



山形の受験校に通う高校生による級友刺殺事件の背景をレポートする。現代教育を考えたいとする映画製作の狙いに反し、学校は異常者による犯罪として取材拒否。少年の友人や若者達へのインタビューで構成された。昭和51年度芸術祭テレビドキュメンタリー部門優秀賞。
●川崎 8 / 22 (日) 16:00～

1969

パルチザン前史

1969 / 120分 / 16mm / 白黒
小川プロダクション



京都大学助手であり、同時に難波予備校講師でもあった活動家、滝田修の革命運動を追ったドキュメンタリー。機動隊との闘争やパルチザン軍事訓練の映像に対して皮肉なほど平穏な京都市民の姿など、滝田修の姿を通して60年代学生運動を映し出す。ベサロ映画祭特別招待。
●アテネ 7 / 24 (土) 15:40～
8 / 6 (金) 14:10～

1974 / 1975

医学としての水俣病 三部作一

第一部 資料・証言篇
第二部 病理・病像篇
第三部 臨床・疫学篇

1974/1974/1975 / 276分 / 16mm / カラー / 青林舎



1956年、“奇病患者”を発見したことから始まった医学者チームの研究と記録を、当時のフィルムで辿った三部作。水俣病の医学における研究史と今日に残された課題を追いながら、水俣病をわかりやすく解説している。第2回世界環境映画祭審査委員長賞受賞。
●第一部 資料・証言篇 アテネ 7 / 27 (火) 14:40～ 8 / 9 (月) 14:40～ ●第二部 病理・病像篇 アテネ 7 / 27 (火) 16:40～ 8 / 9 (月) 16:40～ ●第三部 臨床・疫学篇 アテネ 7 / 27 (火) 19:00～ 8 / 9 (月) 19:00～

1977

しばられた手の祈り

1977 / 29分 / スライド / カラー / 火種工房



軍事独裁時代の韓国で民主化闘争の象徴的存在であり、獄中にいた金芝河の詩を主題に、絵と音楽を組み合わせたスライド作品。富山妙子のリトグラフ、伊藤惣一の詩の朗読、林洋子のナレーションなど、多くの芸術家が参加。新しい芸術のあり方を模索した作品。
●アテネ 7 / 28 (水) 19:30～

1971

水俣―患者さんとその世界―

1971 / 167分 / 35mm・16mm / 白黒
東プロダクション



水俣病を世界に知らしめることになった記録映画の記念碑的作品。チッソを相手に裁判を起こした29世帯を中心に、残された遺族の記憶から真実を探り、潜在患者の発掘までを描いている。第1回世界環境映画祭グランプリ他、多数受賞。
●アテネ 7 / 24 (土) 18:10～
8 / 6 (金) 16:40～

1975

不知火海

1975 / 153分 / 16mm / カラー / 青林舎



有機水銀に犯されながら、その海辺に漁民を抱え続ける不知火海。魚を捕り、食べ、静かに暮らす人々は、水俣病の苦しみを抱えながら豊饒の海に生きている。日々の生活も貧窮し、悪化する申請患者達の姿を通じて、終わらない水俣の苦悩を描く。
●アテネ 7 / 28 (水) 15:00～
8 / 7 (土) 15:30～

生きものばんざい第204話 育て零才! クルマエビ

1977 / 25分 / 16mm / カラー
毎日放送・岩波映画製作所



TBSテレビ系列で1973年から81年まで放送された「生きものばんざい」シリーズの第204話。自然の海では、一度に産卵される20～30万個の卵のうち、孵化できるのはわずか10%未満というクルマエビ。天草の藤永くるまび研究所で孵化したクルマエビの35日間の成長記録。
●アテネ 7 / 28 (水) 19:30～
川崎 8 / 22 (日) 16:00～

映画は生きもの

1978

わが街わが青春
—石川さゆり水俣熱唱—

1978／43分／16mm／カラー
青林舎・東北新社



水俣病の発見から20年が経過し、胎児性水俣病の患者達も成人を迎えていた。「一人前の大人として何ができるのか」若い水俣病患者達は石川さゆりショーを企画し、成功に導く。活動を通して水俣病と向き合い、自分自身を再発見する患者達のドラマチックな記録。
●アテネ 7／29 (木) 16:10～
8／10 (火) 17:40～

1979

日本の若者はいま

1979／30分／16mm／カラー
グンヤフィルムプロダクション



学業の失敗を苦に自殺する学生、ディスコで隔り狂い発散する若者がいる。海外青年協力隊としてフィリピンで働く隊員や、伊豆大島で天然の塩を作る若者たちなど、土本典昭独自の視点で貫かれた1979年の日本の若者像。第23回日本紹介映画コンクール特別賞受賞。
●アテネ 7／29 (木) 17:30～
8／10 (火) 19:00～

偲ぶ・中野重治
—葬儀・告別式の記録—1978年9月8日

1979／55分／16mm／白黒
中野重治を偲ぶ映画人有志の会



昭和に生きたプロレタリア文学作家、中野重治の葬儀・告別式を撮影した記録映画。友人・知人の弔辞が読み上げられ、それぞれが思い出を語り、映像には代表的な作品の朗読が重ねられることで中野重治の人間性、人物像を克明に浮かび上がらせていく。
●アテネ 7／29 (木) 17:30～
8／10 (火) 19:00～

1980

海とお月さまたち

1980／50分／35mm・16mm／カラー
日本記録映画研究所



潮の満ち引きを支配している月。漁師さん達は潮の流れで変化する魚達の行動に合わせて、漁のための仕掛けを変えていく。漁師さんと魚の知恵比べを通して、命の源である海を表現する。新しい命を育む海を大きな満月が見守っている。日本紹介映画コンクール銀賞受賞など。
●アテネ 7／29 (木) 19:30～
8／11 (水) 15:10～

ビデオ絵本 ひろしまのピカ

1987／25分／ビデオ／カラー／シグロ



『原爆の図』で世界に知られる丸木俊の絵本「ひろしまのピカ」の完全ビデオ化。絵本原画の映像に色彩の変化が施されたり、フラッシュバックが登場するなど、絵本とは一味違う、映画ならではの技術が随所に使われている。語り:中山千夏・竹下景子、音楽:小室等。
●アテネ 8／2 (月) 14:40～

1989

よみがえれカレーズ

1989／116分／16mm／カラー／土本典昭
十熊谷博子+アブドゥル・ラティーフ共同監督
／記録社・シグロ



1988年5月15日のソ連軍のアフガニスタン撤退開始から同年12月まで、延べ5ヵ月にわたりアフガニスタンで撮影された。ソ連軍兵士、元反政府ゲリラのリーダー、そして戦火の中を生き抜いてきた人々の生活などを幅広く取材。アウクスブルグドキュメンタリー映画祭(ドイツ) 招待など。
●アテネ 8／2 (月) 16:00～
8／13 (金) 15:00～

1994

存亡の海オホーツク—8mm
旅日記 ロシア漁民世界をめぐる

1994／120分／ビデオ／カラー
NHKクリエイティブ・シグロ



ソ連崩壊後のオホーツク海沿岸をめぐり、そこに暮らすロシア漁民世界を記録。ウラジオストク、カムチャッカ半島、釧路・根室、さらにサハリンから北方四島へと旅し、国籍、人種、社会制度を超えて生きる人々の姿と、オホーツク海の漁業が抱える様々な問題をレポートする。
●アテネ 8／2 (月) 18:30～
8／13 (金) 17:30～

1999

回想・川本輝夫
ミナマター井戸を掘ったひと

1999／42分／ビデオ／カラー
土本仕事部屋



川本輝夫は、埋もれた患者を訪ね歩き、申請を勧め、またチツソと直接交渉の末、年金・医療費を含む協定書を締結するなど長く水俣病闘争のリーダーを務めた。その後市議会議員となって活動を続けるが、1999年2月に急逝。彼の映像を編集して、追悼集会で上映された「私家版」ビデオ。
●アテネ 8／3 (火) 15:20～
8／13 (金) 20:00～

1981

水俣の図・物語

1981／111分／35mm・16mm／カラー
青林舎



幅15mの巨大な絵画、水俣の図。「原爆の図」で知られる丸木位里・丸木俊夫妻によって描かれた絵画は、水俣病の苦悩が塗り込められているかのような迫力を生み出している。そこには絵画と詩と音楽で綴られたもうひとつの水俣がある。第23回毎日芸術賞受賞など。
●アテネ 7／30 (金) 14:40～
8／11 (水) 16:30～

1982

こんにちは アセアン

1982／32分／16mm／カラー
グンヤフィルムプロダクション



海外旅行者が増えたとはいえ、その多くが欧米指向であった1982年。日本人と同じ農耕民族であるアセアン諸国を旅し、そこに住む人々と交流し、相互理解を深めることを目的に製作された。アセアンの文化・伝統・風景・人間等を一人の若い女性の旅を通じて描く。
●アテネ 7／30 (金) 17:10～
8／11 (水) 19:00～

原発切抜帖

1982／45分／16mm／カラー／青林舎



1945年8月7日付けの広島の上原第一報に始まり、79年スリーマイル島、81年の敦賀原発のパニックなどを新聞記事で辿り直し、核兵器だけでなく、原発の脅威にも警鐘を鳴らす。原発大国へと突き進む日本の戦後史を、新聞記事の早めくりで映像化した作品。語りは小沢昭一。
●アテネ 7／30 (金) 17:10～
8／11 (水) 19:00～

1984

海盗り—下北半島・浜根根—

1984／103分／16mm／カラー／青林舎



1981年下北半島、津軽海峡に面した小さな漁村、関根浜。原子力船「むつ」の母港化のため、補償金をつり上げ、海を盗ろうとする国や県の意図と手口を克明に記録。また、漁村に生きる人々の生活や、漁業権をめぐる攻防を漁民の側から描いた。ベルリン映画祭招待作品。
●アテネ 7／30 (金) 19:00～
8／12 (木) 15:50～

2003

在りし日の
カーブル博物館1988年

2003／32分／16mm・ビデオ／カラー
映画同人シネ・アソシエ



1988年『よみがえれカレーズ』製作当時に撮影された、アフガニスタンのカーブル博物館収蔵文化財の記録。92年以後、収蔵品は略奪され、建物自体も爆撃を受けるなど、02年には文化財の7割が失われ、唯一このフィルムに収蔵品の記録が残された。
●アテネ 8／3 (火) 16:40～
8／14 (土) 13:00～

もうひとつのアフغانستان
カーブル日記1985年

2003／42分／16mm・ビデオ／カラー
映画同人シネ・アソシエ



1985年、内戦下のアフガニスタン。78年の4月革命から内戦に至る経緯と、農地改革や女性解放、識字運動が進む中で、の、ありのままの民衆の生活を綴った。ソ連駐留時代、カーブルを撮影したのは唯一このフィルムのみ。アフガニスタンにとっても貴重な記録となった。
●アテネ 8／3 (火) 16:40～
8／14 (土) 13:00～

はじけ鳳仙花
—わが筑豊、わが朝鮮—

1984／48分／16mm／カラー／幻燈社



朝鮮半島から連行され、筑豊で労働を強いられた朝鮮人。画家・富山妙子は、日本人としてその加害性をテーマにしたリトグラフを描いてきた。富山妙子の詩・画による劇中劇、生き残りの朝鮮人坑夫の手記など多層な表現を用い、ジャンルを超えた作品となった。
●アテネ 7／31 (土) 14:50～
8／12 (木) 18:10～

1985

ひろしまを見たひと
—原爆の図丸木美術館—

1985／25分／スライド／カラー
原爆の図丸木美術館／青林舎



広島に原爆が投下された3日後、広島に足を運んだ画家、丸木位里・丸木俊夫妻は、地獄の光景と出会い、以降描きつづけた「原爆の図」は、現在15部作を数える。丸木夫妻の半世紀に渡る共同制作の足跡を辿り、「原爆の図」にこめられた反戦平和の願いを伝える。
●アテネ 8／2 (月) 14:40～

1986

日本—ぶりの里 訪問記

1986／27分／16mm／カラー／青林舎



鹿児島県の離島・長島にある東町漁業協同組合のPR映画として製作。限られた漁場、僻地・離島という条件の下、東町漁協は、養殖ブリ日本最大の産地へと成長。沿岸漁業と養殖漁業の両立、網元制度の廃止、漁協中心の新しい協同性の確立など、その軌跡を探る。
●アテネ 7／31 (土) 14:50～
8／12 (木) 18:10～

1987

水俣病—その30年—

1987／43分／16mm／カラー
青林舎・シグロ



“ニセ患者”発言など、申請者数の増大を押さえようとする行政の圧力が強まった時代。「待たせ賃裁判」「棄却取り消し裁判」も勝利したが、上告・控訴によって結果は先送り。水俣病事件は忘れ去られる時代なのか？ 水俣病事件30年目を迎えた水俣の今を問う。
●アテネ 7／31 (土) 16:40～
8／12 (木) 20:00～

2004

みなまた日記—甦える魂を訪ねて

2004／100分／ビデオ／カラー
映画同人シネ・アソシエ



1996年『水俣・東京展』に掲げる水俣病の死者の遺影を集める仕事の合間に、四季の美しさ、人々の祭り、喜び、祈りの姿などに心惹かれるままにカメラを向け、海・魚・人々の甦りの声に耳を澄まし、当時の水俣の印象と自らの心象を旅日記風に記録した作品。
●フォーラム 7／17 (土) 19:00～
7／18 (日) 11:00～
アテネ 8／3 (火) 18:30～
8／14 (土) 14:50～

